



(復刊24号)

台風 に 思 っ っ

吉岡ふゆ

今年には台風の悪い当り年で十月十七日まで三十号を発表されました、この中には日本をそれてしまつて全く影響のなかつたものもありますが、国土の上陸横断或は沿岸をかすめて風水の大被害をもたらしたのもありました、中でも第廿四号の如きは十一県に猛威をふるい尊き人命を奪つたり被害の額も兆を越すと伝えています、最近では卅九号が本土から遠いマリアナ海域アグリガン島周辺でカツオ漁業焼津船団が風速六〇〜七〇メートルの台風に奔浪されて遭難、二〇九名の船員が亡くなつた悲惨な事件もありました。

台風といふ大地震といふ其の他の諸々の天災人災の中には得て交通も電信電話も吐絶することが屢々で会員の皆様の安否がきずかわれても御見舞も出来ない状態に陥ります、支部長さん幅広い地域の会員の様子が判明するのは可なりの時間がかかる事もありましよう。

このような事も考えられ、已に実施されている支部もおありのようですが広い支部を幾つかに別けてそこに責任者を決めて置きこの方々が支部長に報告して下されば支部長さんらしく、情報も早く出来まふし、この情報はそのような集団被害だけでなくも個人的不幸などを知るよすがともなり得る仕組みと存じます。

一九六六年国際女医学会参加申込締切来七月米國ロチェスターで総会が開かれる国際女医学会出席希望者は、三十二名という豪華版となり誠に結構なことと喜んでおります、早速にも総会に望む態度や旅行のプランをねるわけですが総会と一般観光の外に、行届いた社会施設や、金を存分にかけた医療面の設備や其の運営のシステムなどを見度い方もあると思われまふ、どうぞいませ。

あれ以来三ヶ月、日夜、きびしかった選挙戦を回顧し、竜会長、吉岡房子

去年総会地決定の御知らせ、四十年五月の総会には新緑の仙台で行われ宮城県支部の御骨折りで非常な盛会で御出席の皆様が御満足された事は本紙で御承知の通りです、それだけに地元の方々は大変なお仕事だったとお察しいたしております、この時の総会でも日本

女医会と親しみを持って頂くためにも役員選挙の行われる三年目を除く他の年の総会には地方でという要望が強くこれにお答えすることになり、来る四十年一度は名古屋で御引受け頂き度いと申し入れましたところ(次回二月発行の女医会誌掲載予定)愛知、岐阜、三重、三県合同でと快よく御引受け頂きました。本部役員一同も次の開催地が決り大喜びです。時期は五月なかば、地元の皆様には色々大変なことと存じますが宜敷御願ひ申し上げます、会員の皆様も日本中でも評判の都市となった中京名古屋の活躍ぶりにも目をみはることが出来るのを御期待下さい。

そのためには、日本女医会という社会的集団を背景に職域代表のかたちでたたせて頂くことのできました身の幸福と責任の重大さはここに申し上げようもないことと存じます。新しい時代に適応した立派な集団としてこの先輩の遺産である日本女医会を皆様と御一緒に今後益々立派なものに育ててまいりたい、そのためにはたらかせて頂きたいと深く念願し覚悟をあらたにいたしておる次第でございます。どうかよろしく願上ります。

医療行政に寄せて

山本スギ

選挙後三ヶ月を経まして漸く天下暗れて皆様に御挨拶のできるときがまいりました。さき頃の参議院議員改選に当りましては全国の皆様がかたいたい結果のもとに、心からの御支援を賜りましたおかげで再度の当選をかち得ることができました。まことにありがたいことで、ここにこの紙上を拝借しまして、あつく御礼を申し上げさせて頂く次第でございます。あれ以来三ヶ月、日夜、きびしかった選挙戦を回顧し、竜会長、吉岡房子先生を始め、全国の皆様おひとりおひとりそれぞれ地域に於いて御苦労をございましたことをおもう、全く文字通りの感謝感激の日を過してまいりました。いよいよ日韓批准国会も始まりまして、いそがしくなるばかりです。選挙以来、今日迄に少しも存じ、声をかけて頂きますままにこつそりとあちこち、御挨拶に出でまいりましたが、この調子では日本中にお礼を果すのには何年かかることかと存じます。この間も島津フミヨ女史が、それよりも本筋の仕事の方が大切だから仕事をするのでお礼に代えるようにと云って下さったことでしたが、どんなに皆様にとお礼しても不可能に近いことです。この御礼のとどきませんことは、右の島津女史のおことば通り、御了承願ひましておわびをさせて頂くのみでございます。

さて、皆様も御承知のように現下の医療行政は大きな壁につき当り、社会問題としても政治問題としても国民関心事の最たるものになっております。この医療問題に關しても御多聞にもれず、日本のマスコミの取りあげ方は偏向的で医療担当者の主張し決定しなればならぬことごとくを支配者側に強く発言させて事態を混乱に導いている傾向があるの事実でございます。日本は戦後御承知のように民主主義国となり、福祉国家の建設にたち向つてすんでまいりました。その福祉国家の根底をなすものは「すべての国民は健康で文化生活を営む権利がある」

という国民の生命と権利を基本において考へたのです。勿論これは憲法第二十五条にもはっきりとうたっており、その国民の基本的な権利である健康を守りこれを指導するのは政治であり、同時に国民医療の担当事業として、また国民の健康の指導者として科学とともに飛躍的に発展する治療医学ととりくみ、ひとりひとりの国民の健康を守り、また破れた健康をとりもどし、健全な社会生活をいとなめる状態にするという大任を果し、同時に、近代福祉社会のなかで人命を護る、あらゆる責任を果すために最大に知性を役立てて率先して社会指導、政治指導に当たってきたわけですね。

ところがわれわれが医療担当者としてぶつかった現実はどうだったのでしょうか。医師ぬきの医療体制ムードをつくらうとする無謀や、医師を点数の奴隷にして低医療費制のなかで労働者にしてしまおうとしたり、全くおはなしにならないようなことが展開されてきました。そしてしらすしらすの間に患者と医師の人間関係が破壊されて医療問題はいたずらに混乱の渦のなかにはて知らぬ難問題となりつつあるのです。

一例をあげてみればよくおわかり頂けると思いますが、日本の健康保険は古く大正時代に始り、はたらくひとたちの医療保障を目的として今日に至ったものです。ところが今日各種の健康

保険がそれぞれ立場で発足し、それぞれの目的のために努力して国民皆保険の現状にまでできたのはよいのですが、ある種のは赤字経営でにっちもさっちもゆかなくなっています。その一方、うなるほど金を積んで保険貴族とまでうたわれるようになったものもあります。この際この赤字解消のために各種の保険を統合することがのぞましい最良の方法であるとは誰しも考えるところですね。各地の医師会でもこのことを決議され、その実現を私共議員に要請されます。当然のことです。勿論私たち議員も口を開けば相ことばのように統合をいいます。しかし、実際の問題として統合するということは困難なことでした。それは統合に絶対に反対する組合管掌の健保自体と、同時にそれについている支払者団体があるからですね。なおその反対側の背後にどんな実力が存在するかを考えたとき、それはそうであるということがわかりました。それだからといって統合しないわけにはゆかない。統合しなければならぬのです。誰のために、国民全体の利益のためにです。そして、かかげてきた社会保険、つまり健康保険の真の

いみの理想達成のためにです。このような抽象的な表現ではいけないのですが、この統合問題一つをとりあげてみても、このように政治の場の複雑さはいよいよのもの、今後ますますこれは深刻になってゆくばかりだと思われまふ。歴代の厚生大臣にして、また総理大臣にして解決の

めどさえつかめなかったこの医療行政のかずかずの難問題はどのような政治力をもってして解決がつくのでしょうか。これはその当事者である医師が結束してたたかう以外に方法のないことは自明のことです。

さてそこでわれわれは、今日の社会が抱えているいろいろの要素治療医学の進歩、薬品の発達もとり、社会環境の整備、社会疫病急性伝染病の克服、同時に生活環境の工業化、産業の発展に伴う交通問題、栄養の進歩等々、沢山の近代的条件を理解し、消化して時代にふさわしい医療体制をととのえて前進させるといふこの双肩の使命に徹しなければならぬのだと思います。それはもう単なる治療のみに専念する、開業医ではなく、その地域社会の国民の健康管理を担い、国民の基本的人権である健康を増進し、快的な生活のできるように指導する立場にあるものでなければならぬのです。患者さえくればよいといった治療医でなく、地域社会のひとを対象にした現代の医療担当者でなければならぬと思うのです。

産業開発に伴う諸条件、人口の都会集中による環境問題、国民栄養、乳幼児の発育問題、交通事故、さては公害問題にいたる種々の条件を土台にしてはじめて医療体制が確立されてゆくのです。そしてお互はそれを果すために手をつなぐ社会集団の一員であることです。私はさきに結束をかためてこれにあたりと申しましたが、その結果よ

りも更に重大な悩みを持つ社会集団の一員としての結束なのです。そのようないみに於て社会集団ということばを使いました。

さてこうした時代の先端をゆく、政治の根本理念である人命を尊重し、これを護り育ててゆく医師の立場はあくまでも国家に於て護られねばならないものと思ひます。それなのにこの医師の養成に於ては沢山の不合理を包含したまま、今日の学校経営(私学)や医師育成問題が放置されている状態です。漸くインターン問題がとりあげられてこの制度をどうするかというところになっていきます。現在のインターン制度ではよくない、廃止したい、さりとて、国際的に日本の医師の水準は落しにくい、そこにインターン問題の解決の困難さがあるわけですね。

また日本の医療制度のなかで点教制によつて無視された医師の技術の評価という問題、これは日本の医学の水準を落すことにもなるので医療問題のなかで日医の会長以下苦心されているところですね。

子どもを医師にしたいが、それには

金がかかる、年月もかかる、子どもは医師になりたがらない、といって質のよい子弟は医学を専攻しようという意欲を失いつつあるという、この現実の前で日本の医学の前途をおもひ、医療制度を含めた医療体制の確立に日夜おもいをいたされる全国の父兄として皆様、医療体制の確立が今日政治の上でどんなに大切なことであるかと同時に、また医療問題が医学水準を支配する国家百年の大計につながる大切な問題であることを考えますとき、私どもは朝に晩に話し合い、手をとって進まなければならぬことを切実に思ひます。

勿論、私の国会での発言は背後の皆様のお気持であり、願ひでなければならぬと深く自重しております。今後この紙面を拝借して度々意見を述べさせて頂き皆様と意志のそ通をはかってまいり度いと考えております。どうかよろしくご指導、ご鞭撻を願上ります。

子どもを医師にしたいが、それには

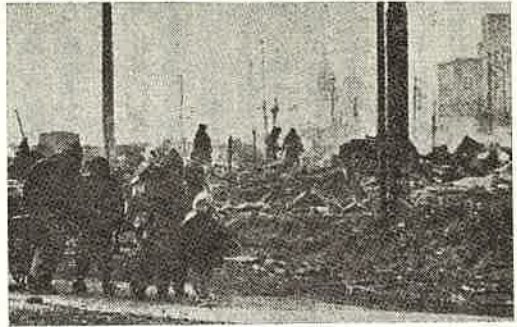


監察医のみた世相の変遷

平瀬文子

昭和二十年三月十日は思出すのもいやな日である。私は昼間はK大学医学部法医学教室で研究し、夜は家の近くの病院で当直のお医者さんがつきつき

——わたくしの戦後二十年——



昭和20年の焼野原(麹町附近)

と出征して当直者がいないというので時々夜当直に行っていた。丁度三月十日夜老母を防空壕に入れ、自分は病院で当直していたら急に周囲が明るくなってきた。ずっと隅田川を隔てて対岸をみた。もう火の海である。空にはB29がいかりたけついていた。これが戦争だなあとつくづく感じた。この病院は結核の病院で余り重症の人もいなかった。皆焼夷弾が落ちて危いから逃げたくれと命令して自分も、カバン一個を持ってにげることにした。防空壕をのぞいてみると母は一番後からとぼとぼ出てきた。

まずどこへ逃げるかを考えたが、近くにある清洲橋は鉄で出来ているので、これは焼けないからよいだろうと考えてその橋を渡った。橋の中央は火の川の様に出される。隅田川は波荒く、ふとんなどをもっている人は火が

つので川へどんどん捨てている。もうこうなったら命が一番大切であるとおくづく感じる。私も一度家へかえり品物を出そうと思ったが、煙が家の中から少し出ているのであきらめたのである。そうこうしている間に昭和二十年八月十五日終戦となり、国破れて山河あり、もう研究なんかしないで臨床でもやったらとある先生にいわれたりしたが、研究もまだ途中だし、このままではやめられないと思つて毎日どうなるかと思つていたが、次第に物資は欠乏してきて買出しをしなければ食物が足りない状態になってきた。

こう食物がないのではやりきれない白米がたべたいと思つて、知人の田舎の福島へ出かけていった。丁度田植の頃であったがさすが都会育ちの私はなんとしてもあのずるずるの田圃の中へ入って手伝うことは出来なかつたので、時々近所の人々の医療相談をしたりした。皆いろいろ野菜とか食物を届けてくれたのでそれをたべて生活していた。ある日近くの農家で御馳走してあげるから来てくれといわれ、大いに喜びいさんで出かけてとんとんたべなさいといわれ調子にのつてたべていたら余り食べすぎてはいってしまった。今思い出しでも食べすぎはたべたりないより苦しいものである。約一カ月位そんな生活をしてしたが、K大学の教授

からそろそろ研究を始めるから出てきなさいといわれ東京へかえり研究をつづけることにした。

研究といつても実験動物の兎もバスケットをもつて、二匹位づつ買出しに行つてそれを大切に三カ月位かかつて血液の方の研究をしていた。その頃広島、長崎からそろそろ東京の病院へも原爆者が入院したりしていた。

昭和二十三年三月、東京都監察医務院が独立し、私も監察医として医務院勤務となった。その頃は栄養失調症、メタノール中毒、特に上野駅で倒れている人々の解剖をすると胃潰瘍、胃癌の多いのが思い出される。しらみのたかつた浮浪者風の死体も沢山検屍した。自殺者も案外多く、殆んど青酸カリによるものが第一であった。その他縊死(くびつり)、催眠剤中毒等によるものもあつた。

個を兄弟で取りつくらしているのを母がみかねて子供をバットで頭を叩いてしまつたり、またある若い男が老女の一人暮らしの家へ来て食事をさしてくれとたのみ、ことわられたので首をしめ、お米を盗んで逃げたという事件もあつた。また、買い出しに行つて若い女の人がよいものをわけてやるといつてだまされ殺されたりしたのもこの頃である。

地方に行つて来た人々も終戦となり皆上京してきて住居もだんだんせまくなり、土地は値上りして、四畳半に六人も寝て、一年未滿の乳児が窒息する事件は殆んど毎日のようであつた。また、財産税が沢山かかり、それを苦にして縊死をとげる人、また金融機関でだまされお金とれなくなり自殺するものも出てきた。交通機関はものすごく混み合つて買い出し人や、かつぎやでにぎわい、電車から墜落するものもあつた道路はでこぼこで交通事故もつぎつぎとおこつていた。昭和三十年頃から戦後といふことばがおかしい位に人々の服装もとのい、たべものもいろいろ出まわつてきた。住のみが依然として解決出来ず、アパートがどんどん増加し、アパート住いが多くなつた。また、次第にガスの使用も多くなり、ガスによる中毒、すなわち一酸化炭素中毒による自殺災害が多くなつた。

最近見たのであるが六畳の間(アパート)で乳児が余り道具が多すぎて子供のいる場所が少なく布団がかかつて、窒息したものがあつた。今考えると戦後二十年の長い間が走馬灯の様に走り去つて行つたが、平和なよき時代になつたものだとおくづく考へている。夏休みの一六甲山の上で今思い出すままに書いてみた。

(監察医務院)

### プロ意識

東条 一子

角力ファンや野球ファンにとつて、今のテレビは楽しみ多いことである。シーズンにはテレビに喰いついて離れない。プロというところが、職業スポーツマンを連想する。私は太り過ぎていて健康保持のため、寸暇を盗んでゴルフを楽しんでいるが、この世界にも勿論プロがいる。しかし、プロの概念は考へてみるともっと広いもので、一技一芸一業に秀でてこれをもって職業とするものはみ

なプロに外ならない。

スポーツはもとより、芸術家もそうであるし、その他凡ゆる職業にあって専門家ともいわれるものもプロということが出来る。近頃は会社その他の広い意味の企業体の経営者なども近代経営学では経営を担うプロでなければならぬといわれるが、その意味で小なりとはいえ、私もまた病院を経営するプロの仲間であるらしいし、プロ意識にもっともっと徹していかなければならないと思うようになった。

さて、子供にとって王だ長島だ大鵬だという、まさに憧れの的であるらしく人気は絶頂である。私はスラブ歌劇団の大阪公演を是非とも観賞したいと思っているが、そのテレビ放送を見ただけでも、主演者の歌と演技そしてあの豊かな合唱には魅了されるものがある、ああいった面に大人の世界にも多くのファンの憧憬があるに違いないと思う。優れた学者、経営者、軍人、政治家などにも必ずそのような人々がいるし、私の職業の医学の分野でも、むつかしい癌の手術者や心臓外科の権威者など信仰に近いものを集めているプロが居られる。

そうした完成されたプロを見ると、楽しく華々しく羨ましく思われるのが人情である。しかしいうまでもなく、そこに至るまでには血の出るような昼夜を分たない努力があったはずであるし、その名声を維持していくことは一層きびしいものがあるに違いない。職業である以上代価を求めるが、代価を

払う三者の批判は常に容赦なくきびしいものがあって、寸時の停滞も許されない。怠ったり人気を失って消えていくプロの姿には淋しいものがある。

一般の平均線にある大多数の人々が、このような巨峯を望むことはできない相談であるが、その中ででき得ることとは、もっと自分の職業に自信をもちプロ意識を強めて、よりよく励むことであらうと思う。私も人並に齢を重ねていくが、このごろになって、野球やゴルフのプロの技をみて楽しんでる半面に、なにか身につまされるものを感じつつ励みの機縁にも思っているのである。

### 教室便り

関西医大皮膚科  
福島 信子

関西医大皮膚科教室は、私共の大学では唯一の女性の主宰する教室である。大原一校教授は、関西医大の前身大阪女子医専昭和十一年卒で、京都大学皮膚科教室で勉強されたのち、昭和十七年母校に帰り、昭和三十年教授になられた。頭がよくてバックボーンのしっかりしている点では女性には珍しい存在だとの定評がある。然し硬い一方ではなく、女らしい繊細な一面も持たせておられる。教室員は現在外遊中の助教以下男女併せて六名という小ぢんまりした教室なので、皆和やかに勉強している、大原教授は学生の

教育と臨床のほかに教名の院外研究生の指導や学会発表など山積する仕事をテキパキと片付けられ、教室員の指導は細いところまで気を付けられる。加えて同窓会副会長や学内運営委員などを兼ねておられるので全く寧日のない多忙さである。日本女医学会にも古いおなじみであるが出席のいとまもない様である。

来春の皮膚科学会総会にはシンポジウムを担当されるので、少い教室員はそれぞれの分担で総動員されているが、仲々手が廻りかね、研究の進まないので、少しは遠慮も必要だと自分自身に云いきかせる始末である。

皮肉の形成部門を担当するというところで私が四月から皮膚科の一部に席を置かせてもらうことになって、唯でさえ事の多い大原教授の気をもませぬ様心掛けている積りの処が、ついついらぬ事の一つも言ってしまう心安い仲なので、少しは遠慮も必要だと自分自身に云いきかせる始末である。

只今の処では、私一人で牛の歩み乍らこつこつ形成手術をやって、少し宛病例が積重って行くのを楽しみ乍ら毎日一嬉一憂している。先天的後天的の醜形から開放されたいとの切なる願いをかなえてあげたいと、思う心と現実の結果との間の距りを、どうにかして技術的に縮めては行きたいと思うが、仲々困難な仕事である。形成外科の手術は、術后相当期間(少く共一年以上)経って見なければ結果を云々することは出来ない、昨年東京警察病院で研修させていただいた間に先生方からう



# 世界をサービスする 海外・国内の

# 旅の御相談は

## 503-1171

### ミヤコ トラベル サービス MIYAKO TRAVEL SERVICE, INC.

本社 東京都港区芝琴平町2番地  
支社 大阪・静岡・厚木・ロスアンゼルス・ニューヨーク

んとたたき込まれ、又実際の病例も数多く見せていただいたので、始めてやっと半年しか経っていない私には今自分の例について語る材料は全くないが、外科医であった私が形成外科を志さず前にも、常識として心がけていた管の少く共私はそう信じていたのであるが、創の取扱いについての態度が、形成をやり初めてから全然違うものになったことは、我ながら変わったものだと思うことである。形成外科が専門化されるべき理由が案外こんな処にあるのかも知れないとひそかに考えている。

### 国際女医学会より

#### 報告をかねて

小野 春生

国際連絡書記

国際女医学会本部より報告書が参りましたのでお知らせ申し上げます。国際女医学会の常任理事会は七月一日アムステルダムで開催されました。ロベールボネー先生はお元気とのことでございます。前回会誌にも申し上げました通り第十回総会は昨年七月九日より十四日までニューヨーク・ロチェスターで開かれることになっております。日本女医学会本部へお申込み下さった先生は次の通りでございます。

(申込み順)

- 長山 トシ 峯 信 阿部 秀世
- 野見山和子 出田 艶子 山崎 倫子

- 宮崎 悦子 遠藤 ハナ 佐野アヤ子
- 小原ツル子 吉岡 敏子 間中てる子
- 森川みどり 三神 美和 ト部美津子
- 大岡 一子 明石寿美子 林 胤子
- 早川 アキ 安田 信子 天沼 もと
- 佐藤イタコ 飯沼さち子 青木 良枝
- 中西清子 早稲田かめ 竹田津すみれ
- 若林 静子 高橋 けい 二見 とめ
- 日谷トナコ 小野 春生以 上三二名

一九六八年の会はウイーンで開かれることになり、演題は英国女医学会が提出した「飢える人々」と定まりました。一九七〇年の会は招待オーストラリア

イスマエルの二つでございます。演題はロチェスターで定めます。会長その他役員の一部選挙がロチェスターでありますので十二月一日までに推薦する事になりました。

会則一部改正の起案がノルウェーの理事会の意見を含め、アムステルダムの常任理事会で出来ましたのでロチェスター総会で賛否をとる事になりました。

教育交流の機関を今作りつつありますので出来しだいリストをお送り致します。

### ロス・ジャーネット女史を囲んで

渉外部 柳 瀬 路子



(ホテルオータニ明星の間にて)

国際女医学会に出席された夫君ヨーク大学総長と共に来日されたカナダ・トロント市の女医さんミセス・ロス・ジャーネット女史が是非この機会に日本の女医さんにお目にかかりたいと仰るので、九月一日 ホテルニュー・オータニの十六階明星の間を用意、竜会長を中心に中村、松岡、山口、小野、山崎、中川、森寿恵、真鍋、鈴木、白井、三辺、柳瀬の当理事が女史をお招きしてお茶を差上げた。

今朝自宅を出ていらしゃったかと思われる様なさり気ない格好で、きさくに入ってきた女史は一見五十年配の地味な日本で言えば高校の先生の様な感じの小母さんで、少しの時間ではあったが良く聞き良く語り、恰も旧知

の間柄であるかのような雰囲気の時であった。

女史のお話によれば、結婚されてお子さんを育て上げられてから後(四十才を過ぎて?)一般医の資格を取ろうと思ひ立ち、若いインタンの間に入っで一しよに勉強されたので、苦勞されたが今はトロント市にオフィスを持ち、女子大学の附属病院のオープン・システムのスタッフになって(この附属病院の先生は皆女医であるという)小児科医として活躍して居られるとの事で、カナダも人件費が高く、プレを雇うのにもパートで頼むので何から何迄自分でしなければならぬ。税金も高く、まして諸払いは小切手で済むが、お手伝いさんの扱いは現金なので仲々やりくりも大変。楽ではないと言っておられた。附属病院の整形外科では所謂形成外科という方にも近頃は力を入れて、刑務所の女囚の社会復帰に大いに手助けとなっているという話。

カナダは女医が少なく、その医師も大半が首都トロント市に集まっています、地方に散っていない。女医の地位は今まで同等でなかった。——というお話から夫君の勤めておられるヨーク大学というのには日本の大学のように一カ所に大きな機構を持つものでなく、各料が小さく集落を作っている。その各集落を総称して大学という事になっているので、集落の小さい方がまとまりが良い——などお話の種はつきなかつた。女史はホテル・オータニで七時よりレセプションが開催されるとい

ことでわずか一時間たらずのお茶の会ではあったがくれぐれも日本の女医の皆様によろしくという事と、カナダにお出かけの時はどうぞお立寄り下さいという事をくりかえしのべて去っていかれた。その御伝言を会員の皆様にお伝え申し上げて筆を擱きます。

四〇・一〇・二九

### 会費をお納め下さい

会費納入状況を昭和四十年年度会費を対象に統計をとってみました。

佐賀県、広島県(本年度分は統計の上でまだ入金になっておりません)は支部単位・至誠会第二病院は一括して納入されますので、ほぼ一〇〇%近い納入率になっております。会誌発行は年四回で今回は第三回目、次回は来年二月で最終回になります。会費未納の方にはそのつど請求書を同封してあります故御送金願います。支部会費納入調査表御希望の場合は御一報下さればお送りいたします。

### 会費納入状況

(昭和40年10月15日調)

支部名	会員数	納入数	支部名	会員数	納入数
中央	三九	千代田	二〇	六	
港	一四	新宿	一六	一六	
文京	三三	台東	一五	一五	
品川	三〇	目黒	一一	一一	
大田	三三	荒川	一九	一九	
世田谷	七三	渋谷	三三	一四	

支部名	会員数	納入数	支部名	会員数	納入数
中野	五二	一九	杉並	六六	二六
豊島	四四	一九	板橋	六六	四四
練馬	三三	二〇	北	三〇	一八
足立	三三	二〇	墨田	七〇	四四
江東	三三	二〇	葛飾	六六	三七
江戸川	三三	二〇	都下	三三	二六
学内	六六	二六	至誠会	二二	一四
東女医大	四〇	一〇	第二病院	二二	一四
青森	二〇	一〇	北海道	一〇	六
山形	二〇	一〇	秋田	二二	一四
宮城	二〇	一〇	岩手	二二	一四
群馬	二〇	一〇	福島	二二	一四
群馬	二〇	一〇	埼玉	二二	一四
栃木	二〇	一〇	茨城	二二	一四
千葉	二〇	一〇	山梨	二二	一四
神奈川	二〇	一〇	静岡	二二	一四
愛知	二〇	一〇	長野	二二	一四
岐阜	二〇	一〇	新潟	二二	一四
富山	二〇	一〇	石川	二二	一四
福井	二〇	一〇	三重	二二	一四
滋賀	二〇	一〇	奈良	二二	一四
大坂	二〇	一〇	京都	二二	一四
兵庫	二〇	一〇	和歌山	二二	一四
岡山	二〇	一〇	広島	二二	一四
鳥取	二〇	一〇	島根	二二	一四
山口	二〇	一〇	香川	二二	一四
愛媛	二〇	一〇	徳島	二二	一四
高知	二〇	一〇	福岡	二二	一四
佐賀	二〇	一〇	長崎	二二	一四
熊本	二〇	一〇	大分	二二	一四
宮崎	二〇	一〇	鹿児島	二二	一四
計	三、六八八	一、〇三九			

住所不明者 一〇三名  
 新卒者 四四名  
 総会員数 三、八三五名  
 ◎会費十カ年前納者

松岡 貞意 早稲田かめの 白松敦子  
 大槻美枝子 間中てる子 日谷トナコ  
 竹田津すみれ 松岡知恵子 齊藤 貞子  
 中川 甲子 藤本 芳子 津島 まさ  
 (五カ年前)

編集後記

☆桐の一葉に天下の秋を知る。といえ  
 ば何となくさびしいけれど、実りの秋  
 といえば豊かな気がする。ともあれも  
 う秋も深く来りました。日本女医  
 会も一歩一歩と前進の途を歩んでいる  
 気持です。この一年の間にはいろいろ  
 のことがありました。五月には仙台で  
 盛大な総会があり、七月には山本杉女  
 史の参議院議員の再選のよろこびを迎  
 えました。

☆嘉屋文字女史(鶴風会)は広島県の  
 衛生部に居られて、原爆の時は自ら被  
 爆され幸いかろうじて生命を全うされ  
 たお方なのです。その嘉屋先生はその  
 被爆の模様を、先に「きのこぐも」を  
 出版されつつ「続きのこぐも」を  
 又「暗雲を越えて」を出版されまし  
 た。今や広島が原爆をうけてから二十  
 年の歳月を迎えています。私は今春広  
 島へ行きましたが、この文化都市とし  
 ての復興ぶりはめざましいもので、東  
 西に百メートル道路が通り立派な建物  
 は整然とした都市づくりをし、川の多

いこの地は、何々大橋、何橋とうつく  
 しい橋がかかり、しかも清い水が流れ  
 て居ました。外見では原爆の傷跡もな  
 いように思えますが、市内には今もな  
 お十万の被爆者が存在し、しかしその  
 人々は自分の罪によらない忍苦に堪え  
 ていこうとしています。それを一般の  
 人々がだまってみずごして居られるこ  
 とでしょうか、将来において決して原  
 爆というものが無いように、又目下な  
 お原爆のために苦しんでいる人々をた  
 だ見ていてよいものでしょうか、私は  
 この嘉屋女史の記録をどうぞ皆さんに  
 読んで貰いたいと思つてやみません。

☆本会副会長定方亀代先生は今春下腿  
 の骨折で聖口カ病院で養生され治療に  
 向われましたが、目下は群馬県群馬郡  
 榛名町榛名荘病院内恵泉老人ホームで  
 御静養中なのです。健忘症になられ  
 て、人別も不明だというのは何とも傷  
 ましいかぎりであると思ひます。

☆来年は愛知、三重、岐阜、の三県の  
 合同で総会を名古屋で開催する予定に  
 なっています。くわしいことは次号に  
 記載いたしますから御期待下さい。  
 (四〇、一一、三、福田幹子)

昭和四十年十一月十日印刷  
 昭和四十年十一月十五日発行  
 編集人 福田 田 幹  
 発行人 日本女医学会  
 発行所 東京都新宿区市ケ谷河田町19  
 日本女医会  
 印刷所 東京都港区麻布田島町63  
 福田印刷株式会社  
 題字(故吉岡弥生)

冷暖房温湿度調整装置施工  
 冷却塔設計施工



東洋熱工業株式会社

本社 東京都中央区京橋2丁目9番地  
 本社事務所 東京都中央区新川2丁目4番地  
 電話 東京(552)4001(代表)  
 支店 大阪・名古屋・福岡  
 工場 東雲